

「日本写真保存センター」調査活動報告(26)

女性報道写真家として活動されてきた二人

松本 徳彦 (副会長)

わが国のドキュメンタリーフォトは古くから男性の仕事場であった。1938年政府は国家宣伝を中心とする『写真週報』を発行するにあたり、女性写真家の登用を決めた。その第一歩が笹本恒子であった。戦後、男女の差別はなくなり女性が報道写真に積極的に関わるようになり、マスコミ世界に女性の活躍する場が増えていった。

満州事変・日中戦争へとエスカレートした時代に関わった笹本恒子(1914～)は、歴史に翻弄されながらも、視点をかたくなに守りさまざまな写真報道を続けていった。

名誉会員の笹本恒子さんが2014(平成26)年4月横浜の新聞博物館で催された写真展『100歳のファインダー』(主催東京新聞社)の際、出版された写真集『100歳のファインダー・日本初の女性報道写真家・笹本恒子』に掲載された作品の写真原板423点が2017(平成29)年12月、保存センターに寄贈された。

笹本さんは1914(大正3)年に東京品川で生まれる。9歳(1923)の誕生日に関東大震災に見舞われ、母に抱かれて親戚の元に疎開する。小さい時から絵が好きで油絵を習っていた。女学校を卒業する頃に先生から何になりたいかと聞かれ、画家か小説家、新聞記者になりたいと答えたそうです。お隣の方が東京日日新聞の記者をされていたので、そう答えたのでしょうかという。そんな縁からその方の新聞社で挿絵を描くことにしました。月に1回くらい、街の様子や人の暮らしぶりなどを描いては社に持ち込み、その場で5円か6円頂いていた。(教員の初任給が50～60円の時代)。午前は自宅で絵を描き、午後は洋装店で働くという生活が数年続き、1938(昭和13)年国家宣伝の写真撮る国策組織財団

法人写真協会ができ、1940年から初の女性報道写真家として活動を始める。戦争の足音をひしひしと感じながらの活動であった。訪日する外国の要人を撮影。日米学生会議、日独伊三国同盟婦人祝賀会、ヒトラーユーゲントの撮影などを撮影し、内閣情報局発行の『写真週報』の表紙や口絵を飾った。

敗戦後、疎開先の千葉で千葉新聞社に入社。1947年から「婦人民主新聞」の嘱託、1950年の日本写真家協会の創立会員として活動する。写真展『生きたニュールック写真展』を丸善ギャラリーで開くなど、活動の輪を広げていく。

戦後の仕事は「婦人民主新聞」で撮り始めた人物写真が契機となって、作家や芸術家、演劇人、平和運動活動家など、時の人を撮る機会に恵まれ、数多くの人物撮影をこなす。1960年安保闘争のときは国会周辺で樺美智子さんの追悼デモを取材するなど、時代の記録を撮影する。現在もお執筆活動が続ける傍ら、マスコミ取材をこなし、写真展などでの講演に精を出されている。この度、写真集『100歳のファインダー』に掲載された写真の原板1,423本が寄贈された。

2016(平成28)年には、私財をJPSに寄付され、若い写真家の活動を支援する「笹本恒子写真賞」を設け、2017年第1回の笹本恒子写真賞をアイヌの人たちを



1946年 銀座4丁目とP.X.



笹本恒子 1952年 両国 女性連れの進駐軍兵士と幕下力士

笹本恒子

撮り続けている宇井眞紀子に贈った。

敗戦・占領という時代を体験した常盤とよ子(1930～)は、繰り返される性差別を写真で記録しようと挑戦し、女性の立場を訴え続けた。

常盤とよ子さんは1930(昭和5)年1月、横浜市で生まれる。戦後間もなくの1947(昭和22)年、遊郭と称された戦前からの公娼制度は廃止されたが、占領下の横浜には進駐軍相手のパンパンや赤線と呼ばれた特殊飲食店街が存在した。

繁華街の伊勢佐木町の裏手には日本人が立ち入れない駐留軍兵士用の飲み屋や、横文字の看板を掲げた安ホテルが軒を連ねていた。そこでは昼間から米兵と女たちが戯れる嬌声聞こえていた。

空襲で父を失った常盤さんにとって、そうした光景は敗戦国とはいえ耐え難いものであった。1951年東京家政学院を卒業。アナウンサーとして横浜の通信社に勤務する。女学生時代をそんな状況下で過ごした常盤さんは、この頃から、写真に興味を持ちアマチュア女性写真家団体の白百合カメラクラブに入会。こうした実態をカメラで記録しておこうと、大栈橋や山下公園に出掛け「別れのキス」や「船員と港の女」(1954年)をスナップしてはカメラ雑誌に投稿した。

土門拳のリアリズム写真が流行っていた時代、「下町のこどもたち」や「筑豊のこどもたち」で発表されてこられた、社会の底辺で懸命に生きようとしている子どもたちの逞しさに感動し、そうした貧しく悲しい社会の狭間で生活する人たちに目を向けていこうと、写真家の道を選ぶ。

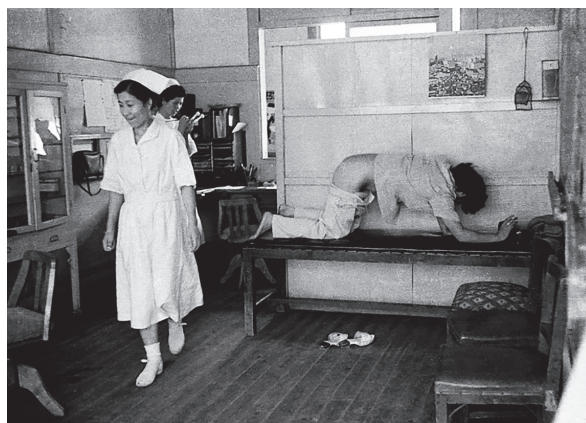
常盤さんはこうした赤線地帯に買い物かごや風呂敷にカメラを忍ばせて、何気なく散歩でもしているかのような格好で、真金町遊郭内を練り歩きながら、色とりどりの派手な格好で客待ちしている女たちを隠し撮りした。

1956年4月には、銀座の小西六フォトギャラリーで個展「働く女性」を催し、なかでも「赤線地帯の女」は大きな反響を呼び、マスコミが大きく取り上げ、女性写真家として脚光を浴びた。特に女子プロレスラーやファッションモデル、海女、看護婦、赤線地帯の女性たちなど、女性でなければ撮れない世界に眼を向けたところに話題が集中したが、常盤さんのそこに働く女性の立場や生き様を特殊なものとしてではなく、ごく普通な人間として真摯な眼差しで捉えたところを評価した。著書に『危険な毒花』(三笠書房1957年)がある。写真原板64コマが寄贈された。



1950年代 横浜市若葉町

常盤とよ子



1950年代 横浜市真金町 赤線地帯診療所



常盤とよ子